随想　夏休みの自由研究

～深く、正しく、子供を評価できているだろうか？～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

朝日新聞デジタルに《宿題をさいごの日まで残しておいた時の家族と自分の反応》というタイトルの小学六年生についての記事と、この研究を絶賛する哲学者の解説が掲載されていた（朝日デジタル、田渕紫織氏、二〇二一年八月十九日、十五時三十分、夏休み最終日に完成した自由研究　斬新な「自由」の宝庫より引用）。

このテーマを二年前にまとめたのは、現在中学二年生の佐々木大（まさる）さん。最近投稿したのは父親の睦（まこと）さんである。

いわく、楽しく夏休みを過ごし残り三日になった日に《宿題を最後の日まで残しておいた時の家族と自分の反応》という自由研究のテーマを家族に告げた、のだそうだ。

文面の最初の部分を引用する（太字）。…《**残り二日目**》朝、**宿題をやらずに学校に行って先生に怒られる夢を見て目が覚めた。もう限界だ。変な汗が止まらない。**《**残り二日の家族の反応**》おじいちゃん、おばあちゃん…「嘘でしょ？　終わるの？」。お父さん…笑って「お父さんも最後の日に、泣きながらやってたな」という。**

二年前の夏、大さんは花火やキャンプ、「一〇〇キロ徒歩の旅」への参加で、長期の休みを堪能していた。夏休み一八日目まで、「楽しすぎて宿題のことなどまったく頭にない」と日記に繰り返し書いている。その後になると、次第に焦りが見えてくる。

「**二九～二二日目には次第に夏休みが終わるという恐怖が僕の心に芽生え始めてきた**」。

残り三日になった夜、宿題をやらずに学校に行って先生に怒られる夢を見た大さんは、冷や汗が止まらなくなった…以下略。

その後の大さんの思いと経過は《自由研究の宿題をやっていないことと追いかけてくる時間に追い詰められて、毎日つづる日記には「そもそも宿題の意義は？」「自分は何のために生きるのか？」「生命は、何のために生まれるのか？」「なぜ人は争うのか？」と展開して行く。過去に戻りたい、と後悔しながら、徹夜で宿題を終わらせ、そのまま学校へ向かった》とまとめられる。

この宿題が哲学者に秀逸と評価されていた。確かに、大人の目から見て面白いと思う。読んでいて、つい著者の子供の頃を思い出す。思えば著者は結構な悪餓鬼であった。入学した小学校は、三重学芸大学（現在の三重大学教育学部）付属小学校で、戦後の教育新方針に燃えていた先生方が多かったように思う。

小学三年生の折に作文と動物観察に特別な興味を覚えるまでは、学校とは苦痛に耐える場所とボンヤリ思っていたようである。

《夏休み》を《夏休み》として特別な休みだと認識したのは、大阪へ転校した小学四年生からである。それまでは何がなんだかわからないままに、姉や友達の動きをはじめとした周りや母親からの話（指示といっても良いかもしれない）で、何となく休んでいた。その頃には、昆虫採集めいたこともやっていたことから、

著者の小学二～三年生頃には、すでに自由課題があったのであろう！

本題の佐々木少年が、この文章を書いたのが六年生の時であることから、著者の小学六年生の夏休みを思い起こしてみた。大阪の夏休みは確か七月二十日から九月五日までの四五日間だったと記憶している。

最初の一週間ほどは朝一番に一～二時間机に向かったが、その後八月いっぱいは友人とセミ採り、魚採り等に夢中で、宿題のこと等頭になかった。大さんに与えられたイベントは当時あるはずもなく、ただ遊びほうけていた。中には、規則正しく《宿題》をこなしている友人も中にはいたのであろう。でも、大半は著者のパターンでいわば無為ともいえる過ごし方で夏を終えていた、と記憶している。

六五年以上前の小学生と現代の子供では、極端ともいえるほど環境は異なっている。単純な比較は意味がないかもしれないものの、昔の平均的な子供の姿を伝え、現代の子供の実態と対比するのは無駄ではなかろう、とあえて書き述べることとする。

添付の原文を見れば、小学六年生としては漢字が少なく、書体やアレンジが雑で整然としていない。しかし遊びほうけていたような紹介に反して、毎日日記を書いている。また、あえて自由研究を最後に残した証左として、夏休みの残り日数が少なくなるに従って、日記に《イライラ》する心情が述べられていた、という紹介がある。

本来のサボリ気質であった筆者の体験からいえば、毎日《日記を書ける》という性格はそもそもサボリではあるまい。本当のサボリなら宿題をすべて最終週あたりまで放り投げる、もしくは最初に全部片付けて、あとは最後まで遊ぶ、というパターンを取る（筆者のサボリパターンだけなのか?!）。

毎日の作業を強制されずにできるなら、すべての宿題を毎日均等にこなせるはずだと思われてならない。

大少年がそういう気質ならば、夏休みの当初から、あえて自由課題を最後まで残し、【宿題を最後の日まで残しておいた時の家族と自分の反応】というテーマで最終日にまとめた、ということになる。

何となく嘘っぽい気がしてならない。確かに《自由研究に手を付けていないことを隠し最後になって家族に打ち明けたなら、家族の反応がどうなるか》はともかく、最後にまとめるつもりである自分は焦ることはないだろう。自分の意思でそれを遅らせているのだから《それをやっていない》ことで冷や汗をかくほどの悪夢を見るとは思えない。

もし「やらねば、やらねば…」と思いながらも自分に負けて遊びほうけていたなら《最後の段階で追い込まれた心理になること》は大いにうなずける。その場合には、日記そのものが最後のドタバタでやっつけ仕事となっているものと思われる。

最初からの計画ではなく、結果として追い詰められて、ジタバタしている。だから「何でこんな宿題が…」から始まって「生きる意味は?!」と展開するほうが納得できる。

なぜ、この記事にこだわるのか！　少年が書いていること作文内容についての評価は筆者も認める。やらねばならない何かを放置し、結果時間に追われたとき、筆者も他人のせいにしたくなる。何でこんなことに…と後悔もする。これからは絶対に…と心に誓う（ほとんど反古にしてしまうのだが！）。

筆者の頃とは違う環境に育つ子供たちは、ずっと大人めいたことを感じ、考えるであろう。大人から見れば《哲学》と思える言葉をつづることもあろう。純粋に追い詰められた子供が《心の叫び》として書きつづったものなら、そこに哲学を見つけてあげるのは大人の役割である。しかしこの文面から筆者には、何やらウケ狙いの匂いを感じてしまう（著者がヒネクレているのか?!）。

問題は、評価する大人に、こうして持ち上げられた子供が妙な自信を付けすぎる可能性、それが与えるその後の影響まで考えて、大人が評価しているのだろうか、ということである。大人が大人としての自覚を持ち、さらに上から目線でなく子供たちに接するのが必要ではないか！　そう感じさせられた記事である。